

あっという間に、英国出発まで1週間を切ってしまった。このジャーナルがウェブサイトに掲載する頃には、わたしはチェスターに到着しているはずである。

7月の前半2週間くらいまで教師としての仕事が続いていて、現在わたしの部屋には学生の提出したレポートの山が出来上がっている。それに続く2週間は群馬県立近代美術館でのワークショップに主に取り組んだ。前回の6月分のジャーナルでも紹介したが、上野真知子さんとわたしの作品を含めた、8名の糸と布を素材とした作家の作品が集められた

「いと と めの」という展覧会が9月15日まで群馬県立近代美術館で開催中である。

7月21日の祝日に、そこで小学生以上を対象にワークショップ「ポケット大作戦！」を行なった。古着を穴が複数空いている「筒」として扱い、それらをつないで参加者全員が着ている服のポケットを連結させてしまおう！という作戦である。

まず、参加者が身につける古着をそれぞれ1枚選んだ。古着にポケットがあればその底を切り取って、他の古着を「筒」に見立てて縫って連結させた。もしその古着にポケットがなければ、好きな位置に穴をあけて「筒」を縫い付けた。袖口、襟ぐり、ウエストなどの「筒」の開口部は、できるだけ他の開口部と連結させ、それができなければ糸で閉じた。はじめは太めの「いと と はり」と格闘していた参加者も、連結が完了する頃にはずいぶん取り扱いに慣れてきていたようだ。参加者全員のポケットが連結したところで写真を撮り、その後に巨大なポケット連結作品は美術館1階のホールに高々と展示された。

ポケットが一番身近な異次元空間である。普段はものを入れておくのに重宝する、とても便利な袋なのだけけれど、時々ものをどこかに移動させたり、ずっとそこに停めておいたりする。駅で、入れておいたはずの切符を探して、服やかばん中のポケットというポケットをまさぐった経験がある人も多いのではないだろうか？そんなときは、たいてい自分の記憶力の不確かさと複数あるポケットを恨んだりする。そこで、わたしはなぜ切符を手に入れた時にポケットに入れたのか、その理由を思い出してみた。ポケットは手を伸ばせばすぐそこであって、口を開けて物が入ってくるのをいつも歓迎している。その気安さから切符をそこに入れたのではなかったのか？こんなに近くにあるのだから、必要になったらすぐ取り出せるだろう、とも思っていた。「ずっと持ってられないから、ちょっと預けるだけ・・・」そう、ポケットは手の「持つ」という機能を肩代わりしているのだ。

だからポケットのない服を着ると、わたしは自分の手の機能の一部を失ったような、不安な気持ちになる。ポケットを身につけていることは、わたしにとっては手の機能を遮るものがないことと同義である。自分がコントロールしきれないこの空間を心の支えにしている、異次元空間の得体の知れなささえも楽しんでいたりする。

古着自体をポケットにしてしまうことで、いつもは付属物でしかないポケットを主役にした、という思惑もこのワークショップにはあった。多くの参加者とスタッフの手によって出来上がったこの作品は、いつもは本体の中に隠れているポケットを、会期中ずっと観覧者の前に晒し続けている。

新田 恭子